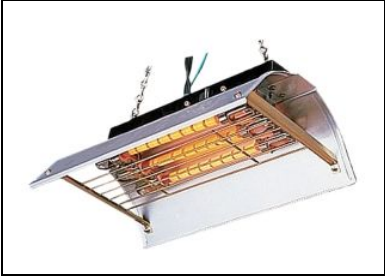



## 5 畜 産

項 目	作 業 内 容
(1) 幼畜の飼養管理	<p>(今月の作業のポイント)            幼畜の飼養管理            サイレージの給与</p> <p>夜間が急激に冷え込み始める時期であるため、寒さに弱い幼畜では飼養管理が不十分になると事故が発生し、経営上大きな損失につながる。畜舎の補修や敷料交換などの防寒対策に注意し、適切な管理を行う。</p> <p>ア 子牛            子牛の体温調節機能は、出生直後すでに完成しているが、外気温に対する抵抗性は第一胃の発達とともに 12 週齢までに徐々に高まっていく。            この時期は、新生子牛にとって体温調整が容易な温度 (13 ) を下回ってくるため、保温に留意する必要がある。            特に、乳用雄子牛などのように集団で飼育する場合、肺炎や下痢等の疾病が問題となるため、日常の観察を十分に行い、異常があれば直ちに獣医師に連絡し対策を講じる必要がある。            また、出産後に早期離乳する場合は、保温効果のある家畜用コルツヒーター等を設置する。</p>  <p>写真 1 家畜用コルツヒーター</p> <p>イ 子豚            新生豚は、被毛が薄く皮下脂肪層が極めて薄いため、寒さに弱い。離乳期 (4 週間まで) では 20 、3 カ月齢で 15 を下まわらないように、確実な保温を心がける必要がある。子豚の寒さによる事故は、出生後 1 ~ 3 日が最も多く、母豚による圧死防止対策も含めた十分な管理を行う必要がある。</p>

項 目	作 業 内 容																																																		
<p>(2)サイレージの給与</p>	<p>なお、家畜生産のための生産限界温度は、表のとおりである。</p> <p style="text-align: center;">各家畜の適温域と生産限界温度( )</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th rowspan="2">家畜</th> <th rowspan="2">適温域</th> <th colspan="2">生産限界温度</th> </tr> <tr> <th>低温側</th> <th>高温側</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>搾乳牛(ホルスタイン種)</td> <td>0~20</td> <td>-13</td> <td>27</td> </tr> <tr> <td>搾乳牛(ジャージー種)</td> <td>5~24</td> <td>-5</td> <td>29</td> </tr> <tr> <td>哺乳子牛</td> <td>13~25</td> <td>5</td> <td>30~32</td> </tr> <tr> <td>育成牛</td> <td>4~20</td> <td>-10</td> <td>32</td> </tr> <tr> <td>育成牛(黒毛和種去勢)</td> <td>10~20</td> <td>-10</td> <td>30</td> </tr> <tr> <td>ヒツジ</td> <td>-3~23</td> <td>-13</td> <td>27</td> </tr> <tr> <td>育成豚</td> <td>15~27</td> <td>0</td> <td>27~30</td> </tr> <tr> <td>成豚</td> <td>0~20</td> <td>-10~0</td> <td>27</td> </tr> <tr> <td>産卵鶏(白色レグホーン種)</td> <td>13~28</td> <td>1</td> <td>30~32</td> </tr> <tr> <td>産卵鶏(肉用種)</td> <td>15~25</td> <td>-5</td> <td>30</td> </tr> <tr> <td>ブロイラー</td> <td>19~23</td> <td>8</td> <td>28</td> </tr> </tbody> </table> <p style="text-align: center;">出典:新編畜産学概論 佐々木義之編著 株式会社養賢堂</p> <p>サイレージの給与時期であるが、気温が低くなっても、サイロを開封した場合は毎日取り出す必要があり、カビの発生等は品質の低下を招く。特にバンカーサイロのように、空気に触れる面積が広いサイロでは変敗しやすいので、必要量を速やかに取り出す。取り出した後は、ビニール等で被覆し、腐敗防止に努める。ラップサイレージでは、開封後における品質の低下を抑えるために2日で1ロールを目安に給与する。</p> <p>品質の悪いサイレージを給与すると、下痢や食欲減退症状を起こし、泌乳・増体などの生産機能障害の原因ともなる。サイレージを給与する際は、品質の確認を行うとともに、日常の個体管理を徹底し、異常を認めた時は速やかに給与の減量や中止を実行する。</p> <div style="text-align: center;">  </div> <p style="text-align: center;">写真2 ラップサイレージの開封</p>	家畜	適温域	生産限界温度		低温側	高温側	搾乳牛(ホルスタイン種)	0~20	-13	27	搾乳牛(ジャージー種)	5~24	-5	29	哺乳子牛	13~25	5	30~32	育成牛	4~20	-10	32	育成牛(黒毛和種去勢)	10~20	-10	30	ヒツジ	-3~23	-13	27	育成豚	15~27	0	27~30	成豚	0~20	-10~0	27	産卵鶏(白色レグホーン種)	13~28	1	30~32	産卵鶏(肉用種)	15~25	-5	30	ブロイラー	19~23	8	28
	家畜			適温域	生産限界温度																																														
低温側		高温側																																																	
搾乳牛(ホルスタイン種)	0~20	-13	27																																																
搾乳牛(ジャージー種)	5~24	-5	29																																																
哺乳子牛	13~25	5	30~32																																																
育成牛	4~20	-10	32																																																
育成牛(黒毛和種去勢)	10~20	-10	30																																																
ヒツジ	-3~23	-13	27																																																
育成豚	15~27	0	27~30																																																
成豚	0~20	-10~0	27																																																
産卵鶏(白色レグホーン種)	13~28	1	30~32																																																
産卵鶏(肉用種)	15~25	-5	30																																																
ブロイラー	19~23	8	28																																																